

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	現在の自己 : 論説
Author(s)	太田, 梧郎
Citation	龍南會雜誌, 135: 8-31
Issue date	1910-03-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5869">http://hdl.handle.net/2298/5869</a>
Right	

國文漢文學の先進先覺者が、論述する所、又は活動する所、よく、其の動機をなしたり。今や、帝國の一天四海、青雲アヅクモのたなびく處、白波の叩く處、舟艦フナクネの至り留る處、東西兩洋文明の調和を、我が邦に仰がむと埃アハてり。されば、時節到來、此の大世界、此の大宇宙の精神的文明を、一致融合して、人道の福音を宣傳し、平和の恩澤を光大する一端は、猶尙、我が國漢學の上に在ることなり。(四十二年二月二十五日手録)

## 現在 の 自己

太 田 梧 郎

此に言ふ自己とは言う迄も無く私自身と言う事である。「自己を如何にすべき乎」。是自己の問題である。「現在の自己」とは此の「自己の問題」に對する現在の私の態度を論ずるものである。

蒼々たる彼の天、穰々たる此の土、更に、暗黒なる過去、迷宮の如き未來、吾人を圍繞する者は総て疑問である。人は疑問の裡に生れて疑問の中に死んで行く。その一生はもとより疑問である。されど住めば都、百姓は肥料の臭を怪しまぬ、紅塵の裡に成長した人は都會の繁華を意識せぬ、慙くの如くあまり多くの疑問に馴れすぎて疑問の中に生活しつゝも、吾等は遂に此の疑問に觸れないのである。先人の教へた道を前へ前へと進む、行きつく果には必ず何等かの歸結があるに相違ないと確信して居る、否しか教へられて、それで満足して居る。人生を旅行の如く觀じて居る間は結構である、峠の險しさも海路の危さも、夜の泊りの楽しさを思

へば憂を霽すやすがあるのである。

「疑」の自覺は何人にもある、何時の世にも存在する。只時代と境遇と、個性とによりて、その強弱の度を異にすると言ふ事は申すまでもない。

「疑」の自覺は苦痛である。しかし自覺した以上中途半途で止めらるべきものでない。「知つたが因果だ」最う取り歸しはつかぬ、辿るべきだけは辿らねばならぬ。

寝ねず、食はず、終日思へ共益なし、學ぶに如かざる也と古人は言つて居る。成程吾等の知識は淺薄である。主觀は空疎である。勿論哲學の深趣を究めたのでもない、豐富なる科學の智識を有して居るのでもない。慧の如くしてしかも尙偏に此の疑問を破摧し去らうと言ふ態度は或は傲慢かも知れぬ、人間の過去の努力と言ふものを無視した様に見えるかも知れぬ。吾等の抱懷してゐる様な疑問なら圖書館に行けば今に解決がつくかの如くに思はれるかも知れぬ。そこで退いて靜かに學べよと言ふ忠言は至極當然の様に思はれる。しかしそれは人生の問題を論理的遊戲と心得て居るから起る事ではないかと思ふ。吾々は道樂に人生の問題を論じて居るのではない。

「あげた右の足を如何に下すべき乎」、世の中に此程切迫した問題があらうか。後から力は容赦なく推して来る、愚圖ついて居ると倒されて終ふ、昨日までは左右の人の爲すが如くに、無意識に前へと踏んだ、しかし何故かと疑つた今日はその譯が分らない間は一度上げた足は容易に卸し度くない。その間に後からは間斷なく力が推して来る、かくて左の足は全身の重さに堪へぬ……あゝこの「右の足を如何に卸すべきか」、是が、吾々の當面の問題である。何人も「生の事實」を否定しうる人はあるまい、過去世の原因も知らず、未

來の目的も分らぬとした處で、宇宙間に自己五尺の體軀の存在は、是、何人も動かし難き事實である。次に「動の事實」、此も疑ふ人はあるまい。太陽も動いて居ると言ふ、地球も動いて居る、時も流れて晝夜を捨てず、宇宙の萬物凡てが動いて居る。その動いて居るコースが直線かはた圓周かは知らないか兎に角動いて居る。勿論吾等も動いて居る。今日の日を送れば明日の日が来る、一步また一步である。この「生の事實」と「動の事實」の間に介在して「如何に明日を送るべき乎」と言うのが、吾等の問題である。

「如何に明日を送るべきか」の問題を最も緊迫せる形式に表せば「此の次の呼吸は如何に爲すべきか」となる。恙う考へて來と、目的もなしに、暗中に摸索してゐる様な吾等の態度が如何にも齒痒くして仕方のない感があるのである。更にこの問題を擴張すれば「如何に生くべきか」「如何に進むべきか」「如何なる生活を營むべきか」に歸著する。而して此等凡の問題は歸する處、「人生の目的」である。「第一義」である、更に推し詰むれば「眞」の問題である。

私に在りてはあらゆる疑問が「自己の問題」に初まつて「人生の目的」「眞」に終る。「第一義に活き度い」、「眞を求めて眞に従ひ度い」、此が私の現在の希求の全体である。

議論の順序よして、私はまづ私の過去と周圍を顧みやうと思ふ。

## 二

地を離れて人なく、人を離れて政なしと言うのは、政治家の第一に心得ゆべき事であると言ふ。而して空氣を離れて生物なく、水を措い魚属なきが如く、時代と別にして個人は論じられないのである。

或る人が言つた。北氷洋に行けば全じ海に二の氷山が反對の方向に流れて居ると言ふ、面白い現象がある、

が是何等の不思議もない。彼の地方には表面と下層を流るゝ二の潮流があるからだ。そこで非常に大きな氷山は下層の潮流に觸れる事が出来る爲め、上層の潮流に逆流しうるのである。人生も慥の如しだ。眞の潮流は恰も百川の海に朝宗するが如く、一條の路を流れ流れて止まないものである。併し尙大河に多くの支流ある如く、淀澱ある如く、人生の潮流にも幾多の旁流がある、暗流がある、表面の流と云うものがある。時代の思潮と言ふ者即ち是だ。而して眞の大潮流の方向を發見して此が乗じたのか所謂天才である、英雄である。され共悲しむべき哉、多くの人は根なき浮草の如くに、時代思潮の表面に浮沈するのみで、遂に永遠の生命に觸るゝ事がないのである。成程そうかも知れぬ、何人もかゝる感想を抱く事が少くあるまいと思ふ。或る時代の思潮は或は不健全かも知れぬ、純潔でないものがあるかも知れぬ、されど歲月の走る所、遂には清濁に白浪の迷るが如く、人類が正當の發展の路を辿つて止まないのは、從來、歴史の教ふる所である。併し人生に一の本流ありとし、時代精神が此と相伴はず寧ろ逆流する事があるとする思想は、或は時代精神なるものを余りに淺薄に觀察した結果ではないかと思ふ。世の中には面白い者が居る、時代の風尙と己との懸隔を以つて己の健全、清潔を誇らんする者が少くない。それが世の中に要のない老人とか或は又空論に嬉んで居る學者先生たちなら珍くもないが、是から新しい時代に出て一活動しやうと言ふ青年輩にして時代精神を攻撃する事を以つて己の剛強を衒はんとする者が多いのである。吾等はその無識と無感覺とを憐まざるをねない。時代精神と言ふのは一時の流行では決してない。水に浮ぶ泡沫が風に吹かれて走るを見て、時代精神の方向だと思ふのは、非常なる臆斷と言はねばならぬ。私の考では時代精神なるものは必ず、人生の本流と全じき方向ありとすれば一を指して居るではないかと思ふのである。假令一步を譲り、時代思潮その者が、本流と

遺流する事ありとするも、その思想が、不健全だとするも、その批判は誰がする、少くとも第一義を最も確に獲得した人であらねばならぬ、完全なる自覺をわたりてあらねばならぬではないか。茲に於いて第一流の文明批評家は古今東西を通じて、最も満圓具足の大人格であらねばならぬ。淺薄な學者又は思想家の時代精神に對しての不健全呼りは片腹痛き次第である。況や吾等青年をやだ。吾等はこの時代に生まれ、時代に育てられた。而して今や新しき時代に隨伴せんとするにさう多大の努力を要する次第である。批判や靜觀の余裕は勿論ない、只茲には吾等の時代が如何に吾等を導いたかを瞥見し度いと思ふ。

### 三

一吾々が生れたのは日本の明治時代である。吾々を取り卷いたのは世紀末の空氣である。更に最も吾等を動かしたのは近代思潮である。

○時代を三期に分つ事が出来るだらうと思ふ。創造すべき初期、守成すべき中期、爛熟すべき末期、是である。舊型を脱して新しき地盤に新しき基礎を築くべき初期。事漸く緒につき諸般の制度具りて社會に權威あるものが生じて来る、此が中期。さて愈々社會の型が定まつて終うと、今度は萬事が停滯する、個人の動きが取れなくなる。文明も葉實と全じく、爛熟すればやがて虫がつく、腐敗して地に落ちる。社會が固定すると、溜水の様に何處かに孕子が湧く。恁くて革新の氣が起つて、一騒動となる、その結果新時代の曙光が輝き出すのである。さう乍ら此の三者の區別は常に歴然と、指示しねらるべき様のものではない、只何時の世、何國の歴史にも社會の發展の徑路に恁う言ふ階段のあるのを認めうる。而してその徑路は長い時代を通じてもそうであれば、短い期間にも多少の痕跡は求めねらるゝのである。個人の一生、少くとも自覺を有するに至つた後の

一生にもこの徑路は存じて居らう。學者が良く言ふ、懷疑期、獨斷期、批判期と言うのも、此の意味ではないかと思ふ。

明治の時代——御一新と言ふ革新の後を受けて起つた明治の時代は言う迄も無く初期である、創造の時代である。而して現在は、明治と言ふ小期間から見れば既に末期か、或は又次の小期の初期かも知れぬが、廣く、明治と言ふ時代を以て先驅せらるべき長き時代より見れば、まだ初期である。懷疑の時期である、何れだけの創設が出来たかさね疑はしい。

明治維新は政治上の變革で、社會上の變革でない。社會上の革命は此からだと言つた人がある。思想、風俗、習慣等の根蒂を改むるには、短日月の能くする所ではない。日本の國民思想、社會精神の革命は、是からも知れぬ。併し我等が生れて、漸く意識をうるに至つた頃は既に日本の社會は亂調子であつた、混沌たるものであつた。而して此は嘗に政治上の變革に由りて社會の基礎が動されたのみでなく、西洋文明を輸入した結果である。更に西洋の世紀末の思潮に動された結果である。近代思想に惑亂された結果である。

日本の社會は幾度か革命の難關を潜り抜けて來た健兒である。佛教が渡來しては聖德太子の彼の英斷となつた。大化の改新も亦漢土の文明の影響である。爾來幾度か起つた我が社會上の爭乱は、要するに、日本固有の精神と此の二の文明、思想とが、充分に満足に融合渾和せんが爲めに、一時表面に生じた泡沫たるにすぎぬである。而して次第に集大成したのである。明治の維新に至り、又西洋の文明と衝突するに至つた。折りも折りとて恰も彼の土に於いても思想の一轉期たりし世紀末と言ふ空氣に觸れて、此に明治の時代は、殊にその思想の方面に於いて、空前の大渦論を惹起したのである。

何時の世にも、その時代の人は、多少その社會の基礎の動搖を感じない譯に行くまい、然し今日の吾等程社會の動搖を感じる者は恐く多くあるまいと思ふ。具眼達識の人は、如何なる禍亂變態の中に在りても、必ず一貫せる理路と、明らかな歸着点とを看取する如く、今日の世に在りても何等の動搖を感じないものがあるかも知れぬ。併、吾等は過去の歴史上の事實から推論して、多少の光明を前途に認むるにしてからが、現在に在りては、如何にも社會の動搖を感せずには居られないのである。併し私は今、日本文明史に於ける明治時代の地位、日本文明と西洋文明の融合、又は世紀末に於ける社會人心の狀態が青年に及ぶ影響等を巨細に論じやうと言うのではない。只如上の空氣の中に育つて如何なる影響をわたかと言ふ事を見やうとするのである。

明治の時代が與へた賜の中、最も吾等が感謝すべきは「自由」であらう。社會の階級、――恐しき迄、人間の平等を沮遏し、自由を無視した封建の制度が壞れて四民平等となつた。此の福音が如何に日本幾千萬の平民を歡喜させ、鼓吹したかは、到底、今日既に自由なる者の恩恵に浴しつゝある吾等には想像の出来る事ではあるまいと思ふ。憲法が發布される、參政權と言ふ自由がわらふ、當時の日本の青年が政治熱に浮いたのは當前である。恣に驥足を伸すべき一進路が開かれたのではないか。足輕の利輔が、恐くも一天萬上の天子様の御補佐役だと言ふ、全郷の誰彼が何と言ふ顯職にあると傳へらるゝ。才幹あるもの蹴起すれば權位高官手に睡してわらふべしと言ふ思想が陰然天下を風靡したのである。吾等の年配でも多少兒供の時が衆に勝れた人であつて、白雲頭を撫でられつゝ、偉い者になれよ、大臣様になれよと獎勵されなかつた者は少いだらうと思ふ。否、今日でも我校の法科にも百五十余の所謂、濟々たる多士が居るが、その中で少し自惚のある人で、あ



は良くは総理の椅子を一度でも占めてゐらうと極めて眞面目に考へて居る人が、必ず少くはなからうと思ふのである。是は岐路に入つたが、兎に角、初めて自由の制度の中に放置されて、孜孜として勉強せねばならぬと思ひ込んだのは事實である。社會階級の打倒、政治上の自由なるものは夫自体で發展が止まるものでない、必ず思想の自由を伴ふものである。此の兩者は互に因か又は果かとなる。古き思想に倦いて叫び出した新思想の聲に動かされて、社會が革命を起す事もある。佛蘭西の革命の如き是である。然るに日本の維新はそれに先づ思想の先驅があつたとしても、まづ政治上の改革よりして、茲に思想の自由を呼んだのである。政治上の施設に由りて舊制度舊習慣が容赦なく破壊し去らるゝ。言論の自由は許された。屈しに屈した人心が何んで黙過しやうか、此處に幾多の思想は紛然として起り、或ひは狂激に走り、又は熱狂して、遂に青年をして歸趨に迷はしむるに至つたのである。最早靜かに勉強する事が出来なくなつた。大臣許りが偉いものでないと言ふ事が分明つた。哲學、文學、此等を以つて人生最上の者と説くものも多い。馬車馬の様に盲目滅法に驅けて居たものも、今は靜かに何處に向つて自分は走つて居るのだらうと考へねばならぬ様になつた。更に何の爲めに走らねばならぬのかと考へねばならぬ様になつた。此處に吹きかけて來たのが、世紀末の思想である。過渡時代の空氣である。

先例を有するものは幸福と言はねばならぬ。新なる家を作るべき努力と面倒がない。併し、又全時に形式に於いて構造に於いて、假令自分の氣に入らないとしても其は沈黙して我慢するより外に仕方がない。自分が今棲んで居る家が氣に喰はぬとあらば、先自己の新しい家を創造すべしである。古い家に住む事を肯んじ

乍ら尙不平を並べると言ふのは少し虫が良すぎる。従つて固定した社會にあつて、無暗と新しい形式を作らうとするには全社會の精神上肉体上の壓迫を覺悟して掛らねばならぬ。しかるに明治の時代は先例のない時代である、先例を失うた時代である。聖代に生れて自由の空氣を吸うた吾等はこの幸福に感謝の意を表せねばならぬ。しかし又全時に新しき先例を初めなければならぬ責任があると言ふ事を自覺したならば幸福即ち苦痛である事が分るのである。創造の困難と言ふ事が前に横つて居る。茲に於いて自由の享受を樂む人は又自由の束縛に苦しむ人と言つて良いのである。而して新なる形式を作るべき人が、終極歸著する處は最高原理ではないか、即ち人生の目的論である。かくして明治の思想界がこの問題に逢著して漸く自覺しつつも、尙多少混亂の状態を呈して居つた時に際して、過去四十年來常に日本の思想界の指導者であつた歐洲の思想界は奈何の状態であつたか。恰も是科學の發達に由りて促進せられ充實せしめられた近代思潮の奔流が、道德、宗教、哲學等の古き礎を動かしつつあつた時ではないか。

## 四

『世紀末』と言ふのは三四年前の日本の思想界に於いて、囂しく喧傳された文字である、何人も良く知つて居る。只茲に議論の順序のため簡單に言はうなら、失はれた先例と新に造らるべき先例との間に介在する混濁の空氣である、舊時代と新時代に跨る混沌模糊たる一時期であると言へば充分である。人が良く言ふ、舊道德廢れて新道德未だ起らず、古き宗教權威を失うて新しき信仰未だ起らずと言ふ時代なのだ。言うまでもない事だが、時代の三期の處で言つたと全じに、此の世紀末の時代も、勿論客觀的概觀的に多少の斷定が出来ぬでもないが、要するにその深淺強弱長短は、此を感得する個人の主觀的に存するものであると言ふ事を承知して貰

い度い。世紀末時代の特色は、生活の不安である、生の動搖である、懷疑の流行である。空飛ぶ鳥は時あり、野を走る狐は巢あり、されども人は枕すべき處なしと言ふは、此の時代の心理の状態である。明治の時代が既に先例を失うた、自由に束縛された時代であるのに、この世紀末の空氣は容赦なく日本の思想界を吹いて廻つた。悲觀の聲、懷疑の聲が起らない事が出来やうか。若い眞摯な一高の學生が華嚴の瀧の、あの莊嚴な瀧壺の裡に永住の地を求めたのも此の時ではなかつたか。思想界は大動搖を初めた、青年は血を燃やし出した。面して社會の木鐸とか指導者とかを以つて任する所謂道德家否寧ろ道學先生等が今更の如く驚いて、一齊に起つて青年の薄志弱行を罵り、日本の前途は如何など、狼狽してみたり、或は淺間の頂上に交番が設けられたり、さては又文部省までが、さらでもの神經をいよいよ過敏にして、直轄學校に向つては、思索的の行動を抑遏し、課外講義等をも可然御注意相成度し等の訓示を下すに至つた事は何人の記憶にも極めて新しい事であらう。吾等が慫る時代を、最も鋭敏な感受性を抱いて、經過して來たものである事を、心に止めて頂き度い。

世紀末の時代は近代思想と表裏を爲す。近代思想の中心を求めて、私は科學的思想と自然主義的思想とし度い。茲に一言し度いのは、私は此等の思想その者を論じて居るものでないと言ふ事である、私は思索専門のものでない、又充分に研究したものでもない、されば私が此處に論ずる科學的思想とか自然主義的思想とかは或は世に言ふものと多少の相違があるかも知れぬ、即ち誤謬、獨斷の個所が少くあるまい、然しそれは仕方かない、何となれば私が此處に論じやうと言うのは夫等の思想自体でなくて、夫等より受けた私の感じであるから。假令私の見解は誤まつて居ても私の感じには偽りは無い筈である。

近世文明の中心は何と言ふても科學の發達延いて科學的思想の普及であると思ふ。遠く溯れば宗教革命、

文藝復興等に根ざして居る近代文明の推移は詰る處、科學の進歩に對する舊世紀の哲學、宗教の敗北ではないか、驚くべき學問の進歩、非常なる智力の擴張、上は日月星辰より、下は人間生活の日常些細なる事に至るまで、科學の説明しない處のものはないとまで思はれたのである。此の智力の擴張の結果は如何。舊制度の破壊、舊信仰の頽廢である。即ち懷疑の風の興つた事である。

又科學の進歩に伴うて起つた物質力の異常なる發達、驚くべき迄の生活の便宜、此等は必然の勢として靈と肉との分離を呼び起したのである。靈肉は古來とて渾然包擁して一致して居たものではない。靈に對する肉の反抗は、僅に社會の權威に由りて、將、當時の社會の生活が朴素であつた爲めに物質欲を誘うものが少かりし故辛うじて厭服しゐて來たのである。然るに今や信仰と言ふ重い心の壓力が除けらるゝと共に、眼前に驚くべき生活の便宜が提供された。限りなき物質の誘惑は群り來つた。恣して徒に智多くして何等の歸趨をも發見しぬ迷へる多くの人は、此に物質の世界へと走つたのである。肉は捷歌を唱へた。所謂耽溺、デカタンの風を生じたのである。加之科學、學問の進歩の結果、富の相違に甚しき懸隔が生じた。生存競争は日一日に激甚となつて行く。恣くして近代人の生活は愈不安となつた、根蒂は動搖して來た。その神經が過敏となり、その思想が偏狂、不健全となつたのも當然である。前に言つた世紀末の空氣とは即ち此の状態である。

近代文明の中心は科學の發達にあると言つた。然し吾等青年が、其の發達した科學その者に由り、如何はぞ動かされ、如何はぞ教へられたかは疑問である。成程、今日科學的思想は普及して居る、何事をも批判的態度研究的精神を以つて取扱ふと言ふのは事實である。恣る思想の中に吾等は成長したのだから、科學的思想の影響を受けたのは、言はずもかなの事ながら、科學その者が吾等に與へた影響となるとチト明瞭でない

様な氣がする。無論これは私を中心とした話だが、私は私の科學の智識の淺薄なのに驚くのである。進化論と言ふ、併し耻し乍ら私は斷片的の智識を有すると言ふの他、進化論の精髓を何程獲得して居るか、恐らく皆無である事を自白せねばならぬのである。その他形而上學にしても又然りと言はねばならぬ。勿論、此は私の過去の怠惰又は不肖の然らしむる處であるけれ共、所謂今日科學の進歩した時代の青年にしてその誇る處の科學の智識が如何程正確な者である乎と言う事は怪しいのである。併し結局、吾等が科學的思想に動かされたと言ふ事は動かし難き事である。

淺薄なる私の科學的思想は、憧憬の精神を私より奪ひ去つた。最高存在に對する憧憬、理想に對する憧憬、美に對する憧憬、此等は正に破壊し去られんとしたのである。科學が私に興れた結果は慙の如きものであつた。今迄萬物の靈長であつた人間は、猿と全一先祖を有すると言ふ事に満足せばからぬ様になつた、久しい間宗教が掲げ來つた理想がどれ丈實現せらるべきか問題となつた、人間が如何程自分の意志もて進みねらるゝものであるか疑しいのである。今まで蛇蝎の如く忌んで來た種々の欲望は人類の生存發達に欠ぐべからざる本能だとも言はるゝ様になつた。神の本質は研究された。自然の贊美は自然の研究と代つた、凡ての物を、血と肉と骨とに分折して、解剖せねば措かぬのである。吾等は淺薄乍らも、當時の社會の言論に率ひられて、小賢しくも人生問題に多少頭を腦まし初めたのを記憶する。しかし、若い單純な心は、その曖昧模糊な態度に堪へず、眞率無垢なる宗教に走らんとした努力を起したものである。もとよりその動機は倫理的の立場より、即ち人格完成の方便より、弱き自力を捨てゝ、強き權威ある或者に縋らんとしたのであるとしても、將又その憧憬の情は余りに淺薄で、余りに輕微であつたとしても兎角その憧憬の精神が、野に生ふ若草

の如くに、若い清い精神の中に萌え出でんとしたのは事實である。權威ある手を與へよ、權威ある聲に接し度いと如何に一圖に思込んだか、今思うても胸が躍るのである。併し無慘にもその嫩葉は、開かずして遂に摘まらるべき運命を持つて居つたのである。それは勿論、私の性格境遇の然らしめた處もあらう。然し冷い刀を揮つて若い翠を切つて終つたのは淺薄な科學的思想であつた。———そうしてその科學的思想は、体系を爲せる何物をも私に與へなかつたのである。

恁の如く、我等は當然迷ふべき時代にあつた。吾等は當然悩むべき境遇に在つた。其の上に吾等は誘れんとしつゝあつた。權威を求めんとするの努力は無効に歸した。されど尙吾等の胸臆には靈火が燃えて居た。權威あるものが密んでゐた。そうして非常の力で爆發せんとする心の底の凡の欲求を遮り防いで居たのである。此の時この獅子心中の虫に、外より應援を與へた惡魔が現れた。それは自然主義の叫であつた、誘惑であつた。

今まで、消極的否定的であつた私は、茲に於いて、積極的肯定的の態度に變じたのである。

## 五

相對的の者の束縛が何とはなしに厭はしくなつて無限を戀ふると言ふ心の傾向は青年に共通なる事だと思ふ。道德と言ふものに故らに反抗して見度い様な時期があるものだ。何故に吾等は道德の前に服従せねばならぬのか、自分の心の底には道德に對する反抗の聲が明に聞かれて居るではないか、吾等は自分が否定したならば、何にも道德に従ふ必要はないと思ふ。要するに道德と言ふものも方便にきぎぬ、その方便を必要とせぬならば、必ずしも道德と言ふ外的強制に服従する必要はあるまい。こんな考が健全不健全であるかは姑く措

いて、兎に角こんな思想が私の心の底に蒔しかゝつて居たと言ふ事を白状せねばならぬ。私は常に自分の感情欲望の醜穢なる事に恐れて居た。半夜人定まりて後靜かに終日の感情の徑路を顧みて見ると、自分はこんなに汚い者かと染々嫌になる。言うまでも無く高潔な、献身的な衝動が起つて夢みる様な氣持になる事も少くない。しかし乍らブライドを去つて、冷に己を顧みて見るが良い、まづ朝起きてより夜床に入るまで、書を讀むに、友と語る時に、町を散歩の折にも、湧きかへる諸の思の聖にして純なる事を首張しわたか。醜惡汚穢なる衝動欲望、凄じき自利心、恐しき嫉妬、殘忍の心、私は今更乍ら、私の感情の不純なのに怖れ戰いたのである。そうして慙うあるは、決して自分許りであるまいとも考へ出した。併し世にありとあらゆる人は、書籍に、口舌に誠に美しい事を言ふ。私の汚い心に較べると彼等は實に神の如き清きものである。多くの友達も何等心に動搖がある様でない。宗教を語り信仰を談ずる。茲に私は自分を恐れざるをわなない様になつた。卑怯な臆病な私は元來世間と言ふものを非常に恐れて居た。世間の人が私の人格に對する見解については殊に細心であつた。茲に於いて私は自分の感情を偽らざるをわなかつた。殊更、純潔な行動と言議とに向つて全身の努力を竭したのである。すると偽善と言ふ聲は心の底に叩かれた。「否偽善に非ず、是正しきものに撞るべき正しき人間の努力也」、是は私自身の辯解であつた。乍し何ら、何故に吾等が昔から傳つて居る道德の制裁に甘せざるべからざるかとの聲は次第に高くなつて來る。

此の時私は自然主義と言ふ聲を聞いたのである。

忘れもせぬ、今の高等學校に入つた年の九月、とある雨降る夕、都門を跡に残した汽車の窓に倚りて、私は田山氏の「蒲團」と言ふ小説を讀んだのである。讀み終つて、私は驚異の眼をあげた。私自身の心、多くの人

の前に今まで語るのさね耻ぢた私の感情が遺憾なく描寫されて居るではあいか。「あゝ慙う思うのは果して自分一人ではなかつた」。是その時の正直な私の感想であつた。總ての人が全じく煩わて居ると言う事が分明つた。私は今は左程恐るゝ必要がない。最早感ずる感ぜぬの問題でなくて、僞る僞らぬと言ふ事となつた。此より私は自然主義の評論及創作に注意する様になつた。そうして西洋の文學家の言論又は創作などを間接乍ら聞いて見ると、その自分を僞らぬ、男らしい態度が非常に感服された。愈々、必強さを覺れたのである。勿論日本の天地は騒然として此の新思想に對して厭迫を加へた。そうして多くの教育家又は青年はその名に恐れて實を極めないものが多かつたのである。併し如何にせん、今や事實上に、多くの青年の殆凡てが、自然主義的思想の影響を蒙つて了つたのではないか。

私は自然主義論をするのではない、直ちに私が感得した自然主義的思想を披瀝せねばならぬ。それは、要するに次の事に歸する。無解決、「無理想、價值づくる勿れ、現實の眞、さては現實暴露の悲哀、個人の嚴肅」。敢へて解決を急ぐ勿れ、理想を失うたる悲をも悶ふる勿れ、吾人の生存の事實は動かし難き事實ではないか。吾等がかく感じかく欲するのを何人が否定しわやう。言う迄もなく吾等は眞を求めて眞に従ひ度い。而して現實を措いて何處に眞を求むべきや。自分の感じを措いて何者が眞であらう。我等には、矛盾もあらう、統一もあるまい、併しそれが人生の眞ではないか。人間の一員として自分が感じ、自分が欲する事それが人間として何んで正しくない事があらう。眞は即ち正である。善である。濫りに價值づくる勿れ、何人が吾等の感じ、吾等の希求を防遏しうるものがあらう。従つて何人が我等の價值を斷定しわやうや。敢へて歸結を急ぐ勿れ、現實に即して人間の眞狀を見よ。理屈は兎も角も、奈何しても、慙うしても、人間はこんなもの



であるから仕方がないではないか。……と憊う私は考へたのである。そこに現實暴露の悲哀は起つて來やう。併かし今は震氣樓の夢に憧るゝの時でない、如何に現實が醜であらうとも、如何に人間か卑しいものとして、それが人間の眞の事實だから仕方がない。人間は神でもない、又獸でもない、要するに人間である。從つて歸著する所は個人の嚴肅と言ふ事である。耻づる勿れ、恐るゝ勿れ、人間と言ふものは結局汝自身の如きものであると叫ぶのである。即ち茲に至つては、吾等は既に嘗つて恐れた、否定した自己の態度を是認したのである、肯定したのである。自分がしか感じ、しか思ふ、故に夫は自分にどつては眞である。憊くして私は自己の尊嚴と言ふ事を、感じねばならぬ様になつたのである。偉人と言ひ、聖人と言ふ、しかしその境遇、運命等の外部的條件を除いて、人間として感じ、思ひ、望む事に於いて何程私と異なるであらうか。全じ人間ではないか。渠の赤裸々たる心情と私の偽らぬ心とを全じ天目に晒したならば結極どれだけの違いがあるであらうか。私は人間をすべて等しなみに見ざるをわなかつたのである。「人間である」と言うのは、私が總ての人を律した唯一の標準であつた。

自然主義は吾等に教ふるに現實の眞と言ふ事を以てした、即ち、事實即眞である。そうして結局自己の態度を是認する、個人の嚴肅を感じると言ふ處まで導いて來たのである。是吾等が自然主義に向つて大に感謝せむと欲する處のものである。

しかし日に晴陰ある如く、人間には光明と暗黒との兩面がある。人間を墮落せる神だとすれば全時に又向上せる獸である。半神即ち半獸である。古來の社會、哲學、文藝、宗教は余りに光明の面に即して、人間に暗黒面ある事を忘れた。否寧ろ、之に恐れて、知らざる眞似をしたのである。憊る白々しき態度に堪へ

で、人間の直なる眞の姿を見よと叫び出したのが自然主義である。併し乍ら反抗するものの多くは又偏しすぎる習だ。今度は自然主義はあまり暗黒な面を見すぎたのではあるまいか。

常に赤き色に慣れたものは血の色に恐れない、私には暗黒と言ふ感が次第に薄くなつて來た、罪惡と言ふ事が分らなくなつて來た。人間として許容してならぬものが無くなつて來た。人は盛に不健全な思想と呼ぶ、しかし何故に不健全なのか、如何も良く分明になかつた。掩が慙く考へるのだから仕方がないではないかと言ふ調子である。しかし人間の哀情か此の態度で満足し終るものであらうか。吾等の心の光明なる側が默視するであらうか。成程人間の現狀は慙うであらう、しかし夫が吾々のトバの行きつまりであるか。吾等は必然慙うあらねばならぬのではなくて、寧ろ慙うあるのだから仕方がないと、諦めたのではあるまいか。然るに今は此の暗黒面にのみ執する事は既に堪へられぬ様になつた。勿論、現前の事實は人生の眞であらう。然るにその眞はあまりに動搖するではないか、多端である、個人的である、時代的である。吾等は最早「事實の眞」に倦いて來た、事實を一貫する法則の裡に眞の「眞」を求めんとするの心が萌えて來た。

總ての努力、憧憬を、歸する處は陽炎を追うて春の野に逍遙う如き稚き夢であると覺つて、「諦め」と言ふ態度をとつて恣に人間のありのまゝの姿を点檢した私は、茲に再び「憧憬」の熱情を燃やす事となつた。併し乍ら初めの「憧憬」と後の「憧憬」とは、内容に於いて大に異なつて居る。前の者は自覺したものでない、現實に觸れたものでない、従つて淺薄である、切實でない。後の者は恣に自己を靜觀した結果である。自己を知つた上の努力である、堅實である、充實してある。生命がある。

「自己に倦いて自己以上の者を求めんとする努力」是が私の今の「憧憬」である。尙異つた各方面より此の一

点に論及して來て結論に急ぐ事としやう。

## 六

宿命説と自由意志論、是、古來凡ての哲學宗教の論争の中心点である。私は哲學上の事は良く知らぬけれども、此に就いての私の感想を語るだけの權利は有して居ると思ふ。

等しなみに、宿命論と言ふものゝ、それには、自ら二様の意味があると思ふ。凡ての科學、如何なる哲學にも超絶した一種神秘不可思議の者によりて、吾等が支配されて傀儡の如く動いて居ると言ふ思想と、一は運命なるものを今少しく科學的に解して吾等人類も凡の宇宙の森羅萬象と全じく決して自然の法則を免るゝ事は出来ない。即ち吾等が今動いて居るのは墮力である、過去の力の堆積の結果である。自己の活動の裡にも吾等の意志は何程の權利をも有して居らぬのである。自ら動いて居ると信するその事さにも、過去の心的活動の結果にすぎない、と恚う言うのである。何だか徹底せぬ様で、論理上の欠陥もあるかも知れぬが、私は固くこう信するのである。第一の意味に於ける運命を否定する程私は傲慢でない、吾等は運命の前に於いては何等の力も有せぬ、又抵抗しやうとも思はぬ、寧ろ潔く此に従ふのが自己の大を致す所以でないかと思ふが、しかし此は眞に奇蹟であつて、吾々が關知しうる所でない。自ら運命の渦卷の中に立つて誰かその運命なる事を自覺しやう。自己の運命を知つて此に安じうる人は、既に宇宙の心に通じたる人ではないか。是私が未だ達しなざる境である、學びなざる處である。私の恐れ悲しむ處は第二の意味に於ける運命なのだ。心理學者は四氣質に分くる。既に吾等の思想、感情は此の氣質の桎梏に縛られて居る。氣質は體質と對應する、この兩者は祖先の血統より傳つて來た。何人が自己の生存について根本的の責任があらう、誰も生ん

で呉れよと頼んで生れて來たのではない、しかし此の世の中に呱呱の聲をあげた時は、既にある定まつた一の氣質と體質とを持つて來て居つたのである。此と共に後天的の要素も又我等が自らの意志で選んだものぢやない。家庭、社會、時代、交友、讀書。そうして此等は何時の間にか此度は吾等の第二の氣質を構成して終ふ。此等の力は更に次の活動を惹起す。その働は又力となる。此からは因となり果となり底止する處を知らぬ。此の後天的先天的のものを加へて、性格と呼ぶ。吾等は此の性格を如何ともする事が出來ぬのである。恰も船を黒潮に乗り込んだ様なものだ、櫓も棹も今は一向役に立たぬ。渦卷く浪に推されて、行く處まで行かねばならぬ……私は恁う考へたのである。

努力さねすれば、奮闘さねすれば、大臣大將、羸ちわらふべきものだを確信して多くの人は進んで居る。私はそう考へる事が出來ずに、性格と言ふものを持て余して居る、只流に棹して河を下る許りぢや。此の兩者の相違は私は矢張り兩者の性格の相違だと思ふ、甲がしか考へるのは過去の甲の多くの思考の結果が當然そうなつて來たので、乙がしかなすのも全じく然りである。倫理學に意志の自由を説くが、如何ほど、自由の天地があるか。僅に群り起る動機と云ふ範圍内にすぎぬでないか。動機は何が生むのだ。氣質ではないか、體質ではないか。凡てが性格である。性格は私にとつては奈何うする事も出來ぬ。私はある非常の場合を豫想してみる。例へば死とか、戀とか。その時私がどんな態度をとるか、それは私に豫言が出來ない事である。その刹那に起る衝動は私以上であつて私の力の及ぶ處でない。その瞬間に於ける私の動作は、私の過去の心的、肉体的活動の總量の主宰する處であると恁う私は考へた。更に一步を進めて、既に現世に於ける力の因果關係を肯定するならば、之を過現未の三界に擴張する事も不可能ではあるまいと、までも朦げ乍ら思うて見

私の過去を見ると、以上の如く私は奈何うも自分の個性の力に抵抗する事が出来なかつた様に思はれる。然るに今私の前に限りなく擴がつて居るのは未來である。茲に問題が起つて来る。眞暗い背后的影を廣かつて居る前面にはうつし度くないと云ふ感じが起つて來たではないか。此からは自分の好きな道を歩き度いと云ふ念願が湧いて來たのである。過去に自己以上の力を承認した私も、前途に向つてだけは私の力を主張して見度い。行手に於いて憔悴落魄せる私よりも光明に輝く私の姿を望み度い。矛盾かも知れぬが私の感情は慙う欲したのである。

六六

說

しかし吾等はセンスに甘心し終りうるものであらうか。センスの緊張した刹那には自己の生命を痛感するだけの快感はあらう。しかし緊張したセンスの弛んだ後の疲勞と不安とは奈何うであらうか。吾々青年が境遇上享受しうべき刺激は第一に感情である、次に舌である、その他僅に目である、耳である。今日の青年にして感情に於いて墮落しない人が幾人あるであらうかと或人が言つた。そうして感情の墮落と他の五官の墮落と如何程の徑庭があらうかと私は考へる。此は余談であるが、その經驗の少い吾等の主觀に徴しても、刹那の歡樂は却つて長い苦痛を伴ふではないか。短いセンスに生きて長く苦しむと言ふのが、人間の哀情であらうか。私の衷心は短いセンスに溺れて以つて永久の苦痛を忘れ終る事は出来ぬ。甘じてセンスに安する事が出来なくなつた。あまりに多端な、あまりに刹那的のセンスを去りて、センスの横底に流るゝ、ある永久の定著的のサムシングに觸れ度いとの望が起つて來たのである。

## 七

「苗を植うれば常に稻をうるの故を以つて、常に苗を植うれば常に稻をうべしと思ふは誤也」との考を。私が抱懷するのを何人が妨ぐる事が出来やうか。吾等の思想と感情とは絶對無限の自由を有して居る。我惟ふ故に我在り、過去の人間の努力——科學、宗教、哲學、それ等の凡てを誤れる假定の上に築かれたものとして悉く否定し去らんとする吾等の態度に何人が異議を狭みうべき。吾等に取りては自分の思想、感情が唯一の眞である、その眞に従ふのが即ち吾等の天職である。吾等の思想、感情が常に無限の感興を覺ふるならば、乞食の境涯さねも、それは吾等の天國である。自分の思想、感情を欺いてまで、世俗の榮華に戀々たるのは、生きながら他人の臭骸となつて了つて、最早自己の生命は無いのと同じではないか。大臣宰相或は唾し

てわれやう、併し心中の空虚の感は如何にして満す事が出来やうか。ナポレオンは偉からう、ワシントンも英からう、然し彼は彼である、吾は吾である。假設、努力の結果、吾等が那翁になりたとするも、しかしそれは最早吾等の生命ではないではないか。生き乍ら他人の臭骸となるのは嫌である、自分は自分として世を送り度い。風來坊でも良い、雲助でも良い、自分が安んじて何等の疑ふ處もなければ夫が自分の生涯である、私は思ひ入つて居た。「自己を樹立し度い」「自己の價值に生き度い」「人生無價值則絶對價值」とは此の時の私の叫であつた。

私は「眞」なるものに生きねばならぬと考へた。而して眞を求めて自己の中心に發見せんと試みたのである。自己の思想感情の外私が聴くべき處はないと思ひこんだのである。私の周圍は私を驅りて慙く思はしむるに至つたのである。そうして忠實に、敬虔に己の心を顧みて見るならば其處に宇宙の影は宿るであらうと信じたのである。私は之の考を正しいと思ふ、誤つて居ないと確信する。然し靜かに自分を顧みて、私は私の心が常に動いて居るのを知るに至つた。従つて私が信じてゐた眞は常に「動的」のものであつた。是では安定する事が出来ない。私の求めて居るのは「靜的眞」である。茲に於いて私は今や己以上の者を考へて見ねばならぬ様にかつた。自己の精神の源泉を探し度くなつた。目的が定まれば、淵源が明れば、「動的眞」は常に一步宛「靜的眞」に近寄つて居るのだから、此に由るとも心が動搖する譯がない。今は個々の自我を捨て、統一した自我に接近し度い、確乎不動の自我に接し度い。即ち自己の宇宙に於ける位地と關係とを明らかにめねば落付かぬ様になつて來たのである。

茲に於いて「自己を樹て度い」との問題は、「如何に自己を樹つべき乎」の問題と變つて來た。

## 八

問題は切實となつた。愈具体的となつた。

眼前に横はつて來たのは、私の一身上の方針問題である。具体的に言へば如何なる職業を選ぶべきかと言うのである。即ち汝の天職は何ぞやと言ふ事である。此の問題の爲めには、私は詰る處、最高原理とそれに對する私の地位との干係と言ふ處まで來なければ心がすまぬのである。前者は即ち人生の目的、後者は私の性格問題である。その仕事が私の氣質に適して、且その仕事の裡に私が終極の目的に對する確乎たる自信をうれば、村夫子何の厭ふ處ぞや。布衣何ぞ辞せんやである。誤りて志を天下に得、權榮心に任ずることも、一度最終の者に照し來つて、自分の眞情に寸隙の罅裂を見出す時、歸來颺然、東籬に菊を愛づるだけの抱負は養ひ度い。要するに問題は「此の宇宙に自己の地位を如何に占むべき乎」と言ふに歸する。求むる處は「唯一眞」である。その眞たる「事實の眞」でない「感覺の眞」でない、「自己の眞」でもない、「絶對の眞」である、「宇宙の眞」である。宇宙と自己との關係を直射する處の「眞」であらねばならぬ。

一步の誤りは百里の差を生む。此の問題が明亮に解決が出來なければ、私は一步も動き度くない。勿論大動位もない、藝術家もない、國家が何んだ、事業がなんだ、すべて無意味である。そうして殘る處只一つ「絶對の眞理」の探求である。

## 九

以上論せる、「自己に倦いて自己以上の者を求めんとするの努力」「暗黒より光明につかんとするの念願」「刹那的感覚を去つて永久的のサムシングに觸れ度いとの希求」「自己を樹て度いとの問題よりして如何に自己を樹



つべき乎の問題」——此等の暗示する處は果して何であるか。曰く、「個々の事實の眞を脱却して事實を一貫せる法則の眞」又は「動向眞の中心たるべき靜的眞」を求めんと悶せる衷心の消き難き憧憬の聲ではないか。「法則の眞」「靜的眞」。是、吾人が何物の珍寶をも擲ちて求むべき唯一不二のものである。感情を直截にし眼を炬の如くにして、吾等は彼等の幻の如き影を趁はねばならぬ、彼等を直感せねばならぬ。一步彼等に近れる時、「新き自己」「充實されたる自己」が生れて來るではないか。而してその影が吾等の心の網膜に判然と象を印する時が即ち、吾等の小自我が擴張して大宇宙に磅礴するの時であると確信して疑はぬのである。

十

科學者は人間の過去の歴史の報告者にすぎぬ。齊藤信策氏がその沈痛なる終焉の辭に於いて言へりしが如く、彼等は人猿同祖を説く。而してそは人に由りて猿を説くのすぎぬ。猿に由りて人を説かん事は、彼等の力以上の仕事である。宇宙、人生は動いて居る。その過去の経過は彼等の研究した通りである。然し前途の測定は到底彼等の不可能の事ではないかと思ふ。

私は人生の報告者を以て甘んじ度くない。指導者となり度い、人生の偉大なる指導者となり度いのである。而して天を焦し空を焼く處の火の柱を何處に求むべきか古人有り、教へて曰く、「求めよ、然らば與はられ、尋ねよ、然らば逢ひ、門を叩けよ、然らば開かるゝことをわん」と。

(完)

四十三年三月十五日夜稿